

ESSAY ~霊園に仙台ゆかりの 人をたずねて5~

中山 文孝（1940～2012）

刃物づくりをとおし、
人と道具のかかわりを見つめ続ける

西大立目 祥子

「中山商店」をご存知だろうか。市内中心部で木町通とよばれてきた古くからの商店街にある刃物専門店だ。店内には、包丁、ノミやカンナ、彫刻刀、小刀などがずらりと並んでいる。群馬県桐生市生まれの中山文孝さんが、東京、仙台での機械工具専門の商社勤務を経て小さな店を起こしたのは昭和46年のことだった。52年に現在地に移り、料理人、彫刻家など多くのプロの求めに応じて、長年の使用に耐える切れ味すぐれた刃物を提供し続けてきた。

「とにかく和物の刃物が好きな人でした。長く大切に使ってもらうのが、うれしくてたまらないんですよ」と話すのは、文孝さんとは幼なじみだったという夫人の洋子さんだ。とはいっても、文孝さん自身が刃物を鍛造するのではない。注文を受けると、手先の器用さと経験知を駆使して木製のモデルを制作し、お客様とのやりとりで修正を重ね、技を見込んだ鍛治職人に製作を依頼する。そして納入した刃物は、長年にわたって面倒をみた。個人の顧客だけでなく、たとえば大学の各学部に機械工具や手道具を納め、そのメンテナンスを行うなど、学校関係の仕事も多かったという。

長く切れ味を保つためには“研ぎ”が欠かせない。納めた刃物の研ぎには文孝さん自らが手をかけた。「研ぎにはこだわりを持っていましたね。傷んだ刃物を再生するのがよろこびなんです。直してあげて、代金はいらぬえ、なんていうのはしょっちゅう。それが親の形見の包丁だったりすると、もう夢中でグラインダーで修理してあげたり」と洋子さん。

刃物への情熱と愛情、そしてその人柄に引かれて、老若男女、たくさん的人が遊びに訪れた。「土曜日はお茶いれに忙しいほど。8時間いた人もいるのよ（笑）。何でも正直にはっきりいうから、率直な意見を求める若者に親しまれたんでしょうね」と洋子さんはぎわいを振り返る。「でも、きついことってお客様とケンカになっちゃうこともあるんですよ…」と話すのは、陶芸家として活躍する長女の中山晴代さんだ。

父は、娘にことさらきびしかった。「私が陶芸展で受賞しても、のぼせ上がるなよ、個展なんて俺の目の黒いちは絶対にだめだの一点張り」。決してほめることがなかったという。晴代さんの作品の造形美は、父親ゆずりかもしれない。文孝さんがつくったという木彫の狛犬、レリーフは、表現力、それを支える技の見事さで素人の域を超えている。

店を訪れる人たちとの交流と作品づくりを楽しみにしながら、文孝さんは店の片隅に設けた研ぎ場で砥石に向かい、研ぎに時間を費やした。「シャーシャーというあの研ぎの音が、父の存在そのものでした」。亡くなつて1年半が過ぎた昨年9月、晴代さんは初めて作品展を開いた。店内で、「文孝・晴代親子展」として。それは、娘から父への心からの“ありがとう”的気持ちだったろう。

享年73歳。墓碑は霊園の芝生墓地にある。桜の季節、ご家族は文孝さんの前に集い花見をいっしょに楽しむのだそうだ。



文孝さんの愛用していた彫刻刀。
毎年、木版画をつくり年賀状をしたためていた。

西大立目 祥子（にしおおたちめ・しょうこ）
フリーライター。地元学の視点で仙台のまちや広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩き』（河北新報出版センター）。

